

ふるさとへの想い

寺社と信仰

山には山の神さまがおり、古代から連綿と受け継がれてきた自然崇拜は、枝分かれし、八百万の神々へと広がっていった。生活を脅かす大雨、早、洪水、地震などの天災や病や死などは、人の力ではどうにもできないので、神に祈るしかなかった。

一 飛泉寺と子易地蔵尊



飛泉寺跡の大銀杏(町指定文化財) 高さ25m、幹回り7.1mの巨木
ダムに沈むため高台に移植された。

飛泉寺は小国の光岳寺とともに越

後村上の耕雲寺の末寺で、耕雲寺の記録によれば、糠野目(山形県高島町)の耕福寺とともに、楠木正成の四男、正儀の子である正勝(傑堂能勝和尚)の開山とされている。口碑や古記録(三瓶氏、加藤利一氏)によると、傑堂和尚が糠野目からの帰途、市野々に至り、ここに七番目の直末の寺として飛泉寺を建立し、応永三十四年(一四二七)八月七日この地で入寂したという。

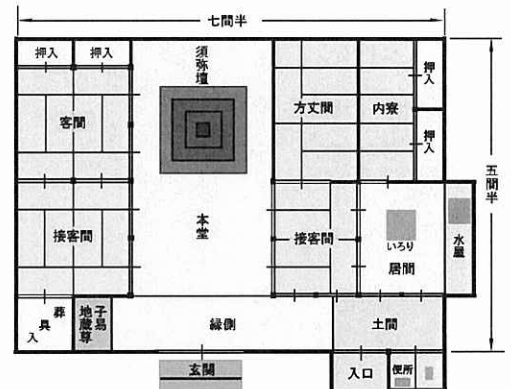
飛泉寺は、市野々字寺の前二十四番地にて曹洞宗総持寺派に属し、本尊は阿弥陀如来(加藤梅次著『飛泉寺沿革誌』より)、室町時代中期に建てられた地方の名刹であったが、宝暦四年(一七五四)三月火災に遭い焼失した。その後、享和三

年(一八〇三)境内二百五十六坪の内に東西七間半、南北五間半、四方須弥壇を持つ立派な寺を再建したが、大正二年(一九一三)三月二日再度火災に遭い、伽藍什器及び集落の重要書類等も悉く焼失した。

わずかに焼失をまぬがれた貴重な記録や菊水の定紋がある幔幕、什器などは楠公の御位牌とともに、本寺耕雲寺に納められたという。

市野々大字会では大正十一年四月三十日の臨時総会において二度目の再建を決定し、「毎年大字費の内より金十円を、飛泉寺再建資金として積立を為す事」を決議した。しかし当時の檀家二十二戸では、資金の目途が立たず、大正十三年三月二十四日の総会において、「大正十七年再建予定の建築延期」を決議、その後再建を断念した。

境内の前庭にある大銀杏(昭和五十三年、町指定文化財)は、樹高



大正2年3月火災に遭う前の
飛泉寺間取り図



大正2年3月に火災に遭う前の飛泉寺(イメージ図)



飛泉寺跡に建てられた子易地蔵堂（昭和57年）



桜峠の登り口にある「鎧坂」

二十五メートル、幹回り（目通り）七・一メートルの巨木で、寺院の古さを物語っている。

楠木正成公ゆかりの傑堂和尚にはさまざまな逸話が残されている。亀岡文殊を参詣した折、請われて糠野目に耕福寺を開山したが、その帰り道、後に十三峠といわれた峠道に入り、白子沢から桜峠を越えて市野々の集落を一望できる坂に出たとき、武者の鎧に御光が差して美しく輝いたので鎧坂と名づけられ、更に前方の山を仰ぎ見たとき、きれいな滝が眼に入ったので、出生の滝と命名したという。傑堂和尚は山々に囲まれたこの仙境に寺を建て仏法弘通の拠点にしようとした。

寺の名称は、「滝尾山」または「滝面山」と表記されているが、いずれにしても出生の滝が見える場所を表している。また、「飛泉」は滝から落ちる水しぶきという意味であり、これも滝と関わっており、市野々の出生の滝が飛泉寺の開山に大きく関わっている。

傑堂能勝が何を思っただけで亀岡文殊を参詣したのか不明であるが、亀岡文殊がある高畠町亀岡は屋代荘にあり、楠正成が朝廷より地頭職を給わったところである。その折に遠藤大和守

勝平入道の請願を受け耕福寺を開山し曹洞宗に改宗した。この亀岡文殊を参詣したことは傑堂が創建した耕雲寺の伝えにも残っている。

飛泉寺跡に子易地蔵を祀る御堂がある。その東南の一隅に「踏まずの塚」と呼ばれ、川原石の立った塚がある。これは傑堂和尚が応永三十四年（一四二七）に入寂したその仮墓所であるとされ、本墓所は寺の裏にそびえる「お開山」の中腹にあり、五基の墓碑のひとつが傑堂和尚のもので、他は代々の住職のものであると伝えられている。

「踏まずの塚」は、ここに足を踏み入れると、足の裏に「底豆」が出



お開山中腹に立つ歴代住職の墓（昭和53年）

るといわれ、村人はけして入ることがなかった。

昭和六十一年（一九八六）檀徒によつてこの塚を発掘したが、墓所と見られるようなものは何も出なかった。

昭和四十七年（一九七二）九月には、開山五百五十年の法要が営まれた。このとき下叶水の済広寺の兼務住職であり、済広寺の本寺である耕雲寺の末寺にあたる米沢高岩寺の住職をお迎えし、開山歴任報恩供養が行われた。

また、昭和五十一年（一九七六）八月十八日には、傑堂能勝和尚の五百五十年忌に当たり、位牌を作り法要を催した。このときの記録に、「大正二年三月二日夜中大災二罹り伽藍什器悉（ことごと）ク焼失依ッテ檀徒一同発願昭和五十一年八月十八日地蔵尊例祭二購入安置報恩二報ユルモノナリ」とある。位牌の表面には「耕雲二世当寺開山傑堂能勝大和尚禪師」とあり、裏面には「応永三十四丁未八月七日示寂古寿七十三歳」と記されている。

飛泉寺は大正二年（一九一三）の火災以来、再建されず、焼跡に子易地蔵尊を祀る御堂が建つのみであったが、横川ダム建設に伴い、平成六



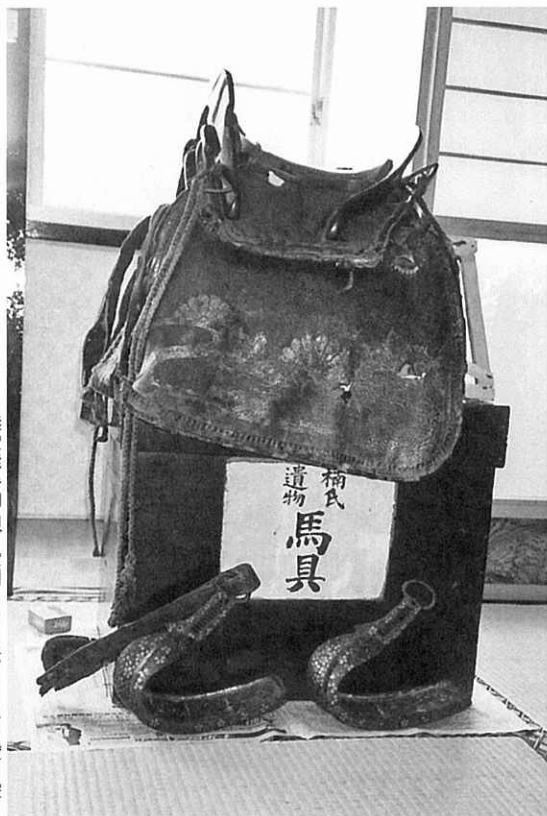
傑堂能勝和尚の仮墓と伝えられる「踏まずの塚」(昭和61年)

年(一九九四)十一月、町内東原地区に移転新築し、ご本尊に身の丈一尺、白木檜造りの釈迦如来像が新たに安置され、同月落慶法要が行われた。移転当時の檀家は二十五戸であった。

◆傑堂能勝使用の馬具

飛泉寺の寺宝とされていた菊水の定紋が入った「傑堂能勝和尚愛用の鞍」など馬具一式は明治初期に盗難に遭い所在不明であったが、飯豊町

中津川の伊藤家に渡り、現在、飯豊町吉祥寺に安置されている。この木の箱に保存されているのは、鞍、鐙、あおり(馬のわき腹に下げる泥よけ)、くつわである。品々の細部について高橋賢治氏は次のように語っている。「鞍の縁は金色で飾っているが、黒漆塗りの前輪と後輪には金蒔絵で五七の桐紋を配し、居木は赤漆を塗ってある。障泥(あおり)はなめし皮で製されたものである。相当損じてはいるが、縁を金糸でとじ菊水の文様がはっきりしている。左足を痛めたという傑堂和尚の所用の伝えを物語るように、特に左障泥の損傷が甚だしい。鐙は踏みこみ其の



傑堂能勝和尚が愛用したと伝えられる鐙と鞍

他は鉄の上に布を置いて赤漆を塗ったもの、鳩胸には桜花を散らし銀真鍮象眼をちりばめてある。裏面に菊水紋が見える。何れ三者とも中々の一品である」

◆子易地蔵尊

市野々には、古くから「子易地蔵」と「送り地蔵」の二つの地蔵さまが祀られていた。

地蔵は、一般的に民間信仰の中で人々を救済する神さまと思われているが、実際は仏教に属する地蔵菩薩である。仏教では、釈迦が入滅してから、弥勒仏の下生までの無仏時代から、宗浄居士を受け持つ菩薩として、

奈良時代から信仰されるようになった。延命、六、身代わり、とげ抜きなどいろいろな地蔵があり、子易地蔵は江戸時代に造像されるようになった。

子易地蔵は、いつ頃からか定かではないが、飛泉寺の東側、玄関に入って左奥に安置されていた。本尊は高さ二尺ほどの木仏像で、子育ての地蔵さまとして尊信されてきた。

特に母乳の足りない者にご利益の名声高く、常に米二・三升と布で作った乳首が沢山供えられてあった。この米を持ち帰り食べると母乳が満たされ、お礼詣では何倍かの米と乳首を供えたという。その拝観の様子について明治四十四年(一九一四)、加藤梅次氏は、「古来より子易地蔵と称し、婦人にして乳不足なる者、祈願をなせば、靈驗著しく乳不足なしと云う、現今に至るも遠きは新潟県地方、近きは近郷参詣者引きも止まず」と書いている。

大正二年(一九一三)三月二日夜中飛泉寺が火災に遭い全焼した。失火の原因について加等梅次氏は次のように伝えている。

「大正元年中凶作二遭ヒ檀信徒ノ生活甚シク困憊シ従ッテ寺院ノ運営困難ヲ極メ檀家一同協議ノ上経木採取



市野々の地藏尊 (昭和56年)

者岩手県小原謙太郎ト云ウ人ニ寺院一部ヲ僅少ナル料金ニテ貸付其ノ料金ハ当時住職丹羽祖鏡和尚ノ収入ニ充テタリ、小原ナル人ハ冬季中ナルヲ以テ其ノ経木乾燥センガ為三尺四方ノ押入ニ木製火鉢ニ多量ノ木炭ニ火ヲ点シ其ノ火氣強クナリテ直チニ乾燥シアル経木ニ火ガ燃エ移リ広ガリテ寺院内一面火ノ海トカシ和尚ノ一族始メ小原氏ノ経木職工等漸ク身ヲ以テ着ノミ着儘 (きのまま) ニテ逃ゲ一命ヲ助カリタルノ状態ニアリキ」

当日寺には住職の家族と経木職人が居ったが、住職は不在だった。三月と云えば周りにはまだ相当の雪があり、夜中のことゆえ逃げるのが精一杯でとても地藏尊を持ち出す余裕はなかった。しかも地藏尊は木造であり、誰もが焼失したものと思っていた。翌日火災の後片付けの際に近くの田んぼの中から黒く焼け焦げた地藏尊を発見した。その時のことは、「其の霊験灼 (あたら) かなるに衆人悉く驚愕したり」とある。檀徒は伊藤周蔵氏宅 (はちろえむ) を借りて、床の間に地藏尊を安置した。ところがその夜中に、座敷の方で雷でも落ちたようなものすごい音がして、驚き起きてみると地藏尊が座敷の真ん中に転がっていたのであった。檀徒はこのことを聞き「もったいないことだ、霊験な地藏尊のこと何らかのお告げでないか」と熊野神社に集まって「神おろし」を行ったところ、「ご本尊の仏像は全部焼けたけれども自分は火傷で残った。自分が入るだけの小さな建物でよいかから焼け跡に建ててもらいたい」とのお告げがあった。村では早速その年雪が消えると、五月に飛泉寺の跡地に二間半四方のお堂を建て地藏尊を安置したとの言い伝えがある。



東原に移転された飛泉寺に安置された地藏尊

飛泉寺の再建はならなかったが、その焼け跡に地藏尊を安置する堂宇が建立された。毎年旧暦七月十八日は例祭日で、十七日の夜祭りには住職に読経してもらい、檀家一同地藏

尊の前庭に集まって盆踊りを行い地藏尊を慰めた。横川ダム建設により東原に飛泉寺が新たに建立されたが、そのお厨子に再び安置された。



東原に再建された現在の飛泉寺

◆ 傑堂能勝

傑堂能勝は、名を正勝といい正平十年（一二三五）河内に生まれた。父は南朝の忠臣楠木正成の四男正儀、母は篠塚伊賀守の女の伊賀局といわれている。四条畷（しじょうなわて）で戦死した正行、正時は伯父に当たる。当時は南北朝の戦乱のときで、正勝も早くから父に従って戦に出ていたが、ある戦（一説では天

王山の戦）で、敵の流れ矢を膝に受け不自由な身となり、療養の日々に仏書を読んだことから発心して天授五年（一二七九）二十五歳の時、臨済宗大雄寺二世古剣智訥の許で剃髪し、傑堂能勝と名を改めて仏門に入り修行を積んだ。

能勝は元中九年（一二九二）三十歳で大悟し開本から印可を許された。応永元年（一三九四）北越の土豪本庄一族の外護を得て、越後村上の杜沢（杠沢）の地に小庵を結び耕雲庵と称した。師の開本に知らせたところ霊樹山の山号を贈られ、耕雲寺を開いたが、師梅山を開基とし自らは二世となった。この地を本拠に教線を広げていった。能勝が開いた寺は八ヶ寺といわれ、さらにこれらの寺の末寺が作られ、現在では耕雲寺の直末は八十寺を数え、末寺をあわせると八百を超えている。

この曹洞宗布教の広がりには、道元禅師の出家至上主義ともいべき教えから、総持寺を建立した宝山たちによって大衆化され、時の権力にも認められ、地方の武士や守護、地頭、豪族といった支配層に受け入れられていったことが大きい。草深い農村、農民へ布教したのではなく、地元有力者の寄進や勧請によって開山され

ていった。屋代庄の耕福寺は天授五年遠藤大和守勝平入道の勧請によって曹洞宗に改宗したといわれる。市野々の飛泉寺開山も誰かによって勧請されたものであろうか。

その後、傑堂能勝は中国に渡り、再び耕雲寺に戻った。その後は耕雲寺の山から下りることなく、学問の研究と弟子の育成に力を注ぎ、生涯黒衣のまま応永三十四年（一四二七）八月七日七十三歳で入寂した。

◆ 集落とのかかわり

飛泉寺が市野々の地に建立された経緯については、寺の歴史や関連する史料が少なく、解明されていない。

しかし、室町末期の曹洞宗寺院の建立、開山については、曹洞宗に帰依もしくは信仰する在家の各地の支配層の勧請によって作られる場合が多かった。飛泉寺の場合も、いずれかの有力者の勧請の要請が村上の耕雲寺にあり、傑堂能勝の指示により弟子に当たる人物が開山をしたのではないだろうか。

そうすると、この山深い市野々及び周辺の地に一寺を建立するだけの集落と人口があり、信仰の中心となるものを求めていることになる。各

戸別の戸籍などが整備されていない時代には、寺が弔いを行い、代々の累系を記録してきた過去帳は戸籍簿の代わりを果たしていた。また関所を通るための手形も寺が発行していた。寺が行政組織の末端の役割を果たしていたことになる。

こうして寺は、集落が社会的な役割を果たしていく上で必要不可欠な存在になっていった。そのため、寺を維持していくことは、寺のためだけではなく、集落としての重要な課題でもあった。寺には檀家の代表として総代を作り、改築、修理、祭りなどの世話などを寺と集落全体で維持していた。

長く檀徒総代を務めた加藤利一氏が伝え聞いたことや各種の伝承を調べたことをまとめてみる。

大正二年（一九一三）に焼ける前の飛泉寺は、大きなお寺であった。明治十二年（一八七九）に書かれた記録によると、東西に七間半、南北五間半であった。中央に、四方須弥壇があり、本尊は阿弥陀如来である。左右に客殿、接賓間二室、方丈間、典座寮などがあった。正面玄関、左側に子易地藏尊が置かれていたが、位牌堂はなかった。庭は二百五十六坪強の広さで、右側奥に踏まずの塚

があった。なお記録によれば、寺には、無上尊と書かれた扁額、享和三年（一八〇三）再建の時の棟札、古印などがあったという。

境内にある大きな銀杏の木は、傑堂和尚が杖に使っていた木を挿しておいたところ根付き大きくなったものと伝えられている。また、寺の裏山は御開山と呼ばれ、中腹には歴代住職のものといわれる墓がならんでいる。この近くには清水が湧いており御開山清水といわれ水量豊富で近年まで使われていた。

寺の行事としては、五月八日に、市野々の各所に祭られているお薬師さま、観音さま、お不動さま、金毘羅さまをまとめて供養する祭りが行われる。旧暦七月十八日は例祭日で十七日の夜祭りには子易地蔵供養と盆踊りが行われる。また、小正月には女衆が餅を持って寺年始にいった集落の総会、常会なども寺を会場にして開催していた。大字会の備え付けの書類も飛泉寺に保管してあったので、火災によりすべて焼失してしまった。

また、子易地蔵が置かれていたが、昔は子どもたちが寺でよく遊びその遊び道具として、投げあったという。大正二年（一九一三）の火災で焼け

残った地蔵尊は黒地蔵と呼ばれるようになった。表面は焼けていて、触るとほろほろと剥がれてくるので晒して巻いたそうである。表情は分からなくなっていたが、かろうじて彫り物であることは判別できたという。このあと飛泉寺の本尊が黒地蔵であるともいわれているが、糠野目の耕福寺の本尊も黒地蔵であったので、同じ傑堂和尚の開山の寺ということになり、取り違えられてきたと思われる。曹洞宗に限らず多くの宗派では寺を預かる住職は出家し修行を積ん

だ僧なので、妻帯することは認められていなかった。従って寺の住職は宗門で決めて派遣される制度であった。親鸞が妻帯を公言してからのちは公式には認められていなくても現実に妻帯し、世襲になる場合も増えてきた。飛泉寺でも幕末から明治の頃はすでに住職は一家となっていた。しかし、子どもが生まれるときは、寺の建物の中では出産してはならないしきたりで、寺の外に掘っ立て小屋を建ててそこで出産し、三週間ぐらいそこで過ごしたという。ま



二世白ガイが書いたとされる書



た、大正の火災で焼けた後は、堂宇もなく、住職はいなかったが、葬儀などを出さなければならなかったのだ、近在の寺に兼務住職として役目を務めてもらった。白子沢の清安寺、伊佐領の洞源寺、下叶水の清安寺として飯豊町の吉祥寺が兼務住職となった。

傑堂和尚の開山以降の歴代の住職については、ほとんどわかっていない。享保十七年（一七三二）頃、白ガイという住職がいた。『熊野三山鎮座記』という文書を残しているがその中に、「滝面山飛泉寺二世中興白ガイ」という記述がある。ほかにこの白ガイの書といわれる掛け軸が十本ほど残っているが達筆である。二世中興と名乗るところを見ると、なかなかの人物であったのかもしれない。文政九年（一八二六）の葬儀か法要の文書には、相契という名がある。また明治の初期、権訓導として楠英光の名が記されている。明治二十八年（一八九五）頃には傳宗という住職であった。また大正二年（一九一三）の火災のときの住職は丹羽祖鏡という人で第二十世であったという。大正二年以降は兼務住職となり各寺の住職が兼務してきた。

二 済広寺



屋根葺き替え前の済広寺（昭和30年）

下叶水にある済広寺は、江戸時代初期の慶長年間（一五九六～一六一五）に米沢高岩寺の末寺として創建された。開山が高岩寺五世昌峰是雲大和尚、開基はこの地の土豪、丹氏末裔の徳高院実法全相居士（天明三年十二月四日卒）。本尊は総高

五十二・五センチの阿弥陀如来坐像、木像である。済広寺の本寺である米沢高岩寺は村上耕雲寺の末寺であるから、済広寺は耕雲寺の孫末寺ということになる。新潟県村上市にある耕雲寺を開いたのは、南北朝期、後醍醐天皇に



忠勤を励んだ楠木正成の四男正儀の子、正勝（後に傑堂能勝を名乗る）である。同じく曹洞宗で傑堂和尚が創建したとされる市野々の飛泉寺とも関わりが深いことになる。

高岩寺は、米沢、東寺町にあり、五世昌峰是雲大和尚の時、伽藍を新築し寺門の伸張をはかり叶水に済広寺を開山し、次いで六世鉄洲正菱大和尚の代の元和元年（一六一五）六月、新股に西照寺を創建している。すでに市野々に飛泉寺があり、曹洞宗の教線が広がっていたので、叶水の有力者丹氏の協力を得て開山したものであろう。



屋根葺き替えした移転前の済広寺（昭和59年）

関ヶ原の戦いが起こった慶長五年（一六〇〇）、天下の形勢が騒がしくなったので、会津置賜を領した上杉藩では領境警備のため、大石沢の城平、土尾の城ノ峰にそれぞれ城塞を造る工事を始めた。しかし、城塞工事は関ヶ原の戦いの終結とともに中止された。この工事の当事者は藤田掃部（叶水）と藤田刑部（大石沢）で、ともに津川城主であった藤田



下叶水の高台に移転新築された済広寺



済広寺の本尊、阿弥陀如来坐像（県指定有形文化財）

能登守信吉の一族であった。しかし、藤田能登守は城中の反発を買って会津を出奔したため、当地にいた藤田一族も他に移住したようである。

叶水の築城を担当した藤田掃部は、家臣丹和泉守（名兵衛、幼名雅樂之助）とともに生活の本拠を叶水に置き、人心の安定、社会教化のため寺社の建立に努めた。済広寺は元和元年四月、丹和泉守が開基となつてゐる。開基が、徳高院実法全相居士と、丹和泉守の二人の名が伝えられてい

るが、片方は法名であり同じ人物か、一族の末裔か、全く別なのかわからない。あるいは一時無住となつた寺を再建したものであろうか。

済広寺に安置される本尊は阿弥陀如来坐像である。

「木造漆箔阿弥陀如来坐像」
像 高 五十二・三センチ
（二尺七寸三分）
髪際高 四十四・二センチ
（二尺四寸六分）
肩 張 二十八・二センチ

（九寸三分）
膝 張 四十三・〇センチ
（二尺四寸二分）
寄木造り（頭部および体軀前後矧、膝矧合、彫眼）
白毫（木のごとし）
弥陀定印（妙觀察智印）を結ぶ
円顔で腑眼、唇に朱のこる
豊かな肉髻（につけい）、精細な螺髪（らほつ）、長い耳に明瞭な頸三道、弧をえがく眉の下に水平な腑眼、通つた鼻に柔らかな唇、姿態もおだやかで衣文には翻波さえのこつてゐる。正に相好円満、容姿端麗とはこのような像をさすものである。しかし良く観察すると、金箔のはがれた処々に朱の色がみえ、又唇に朱がのこつてゐる事は本来この像が彩色像であつた事を物語つてゐる。「尚この像の連座に、宝永貳年八月七日 □□也 当寺現住持音代作 とあつてこの連座が宝永二年（一七〇五）に造られた事を示している。更に須弥壇に素朴な菩薩立像が二軀安置されており、一は像高四一・〇センチ（二尺三寸五分）、二は三八・五センチ（二尺二寸七分）あり、双方とも両手を失つてゐるので、いずれが観音か、いずれが勢至かは定かではないが、一方の



済広寺裏に立つ歴代住職の墓

の背部に単純な内割りを施しており、風格や衣文などにも古様をもつてゐるが、阿弥陀如来像がこの寺に安置されてから、その脇侍としてこれは同地で造顕されたものであろう（武田好吉氏、『小国町史』）。

その由来ははっきりしないが、台座裏に「大同四年雲漢作」の銘がある（大同四年＝西暦八〇九年）。その真偽はともかく、藤原時代の様式を持つ鎌倉仏の名作で、小国地域最古の貴重な文化財となつてゐる。下叶水では、この本尊は秘仏とされ、見ると盲目になると言い伝えられていたため、その姿を拝した人はほと

んじなかったという。

今回の移転前は、境内三百六十四坪、本堂三十二坪、庫裡三十一坪で、中興、大安寛道和尚（文化十四年（一八一七）五月一日卒）によって建立されたといわれる。

昭和四十七年九月八日、済広寺に

法性院（下叶水）

村中橋を渡り北に行くくと小丘上に八幡神社があり、その東麓に「法性院跡」がある。この土地の人は法性院卵塔または単に卵塔と呼んでいる。卵塔とは台座の上に卵形の墓石を建てた石塔をいうので無縫塔ともいわれ、これらのある墓地を呼ぶこともある。側に法性院の墓地があるので、そのように呼んだものであろう。

戦国時代の末期の慶長年間、関ヶ原合戦に備えて、城が峰（叶水）と城の平（大石沢）に塁を築かせることになった。そして城が峰の責任者、藤田掃部は叶水を本拠とし、僧（法印）を連れてきて住まわせた。これが法性院の始まりであるが、詳しい由緒は不明である。

空海を開祖とする真言宗は、山岳密教や修験道と習合し、その教義や儀式礼法などの違いから多くの流派

大石沢の万徳寺と新股の西照寺が合寺された。高岩寺の山口友祥老師により合併入仏式が執り行われ、檀家百六戸となった。横川ダム建設により、現在は下叶水の後方山手に移転新築されている。

に分かれるが、法性院は小国の真言の寺は、広沢流の流れを汲む京都醍醐派の三寶院の末といわれている。法印（山伏）は加持祈禱によって御霊の鎮護や病の治癒も行った。山岳密教の修験を積み、山に暮らす人々の生活の災厄除けを受け持ったが、地域の年中行事にも関わり、また村の招福にも関わった。

法性院は明治初期まで続いたが、法印島貫利一は、明治初期火災に遭い、神奈川県相模原に移住し廃寺と

四 市野々熊野神社

熊野神社の創建については、幕末から明治時代にかけて村の重鎮であった加藤英吉氏によると、市野々を開いた毛利勘兵衛という人が、文中元年（一三七二）に紀州和歌山の熊野に鎮座する熊野神社の分社として建立寄進したものである。

毛利勘兵衛については不詳であるが、毛利家は市野々が宿場として栄えた頃、駒頭という役目を仰せつかった。宝暦五年（一七五五）七月に故あって毛利家が市野々を去ると、その後熊野神社は高井七郎

なる。本尊不動尊は済広寺に寄託保存された。

右エ門と加藤伝八が主となって維持管理を行った。

明治元年（一八六八）の神仏分離令により、紀州熊野の本地仏（阿弥陀、薬師、千手観音）と分離し、熊野神社として祭祀された。

祭神は、事解男命（ことわけのおみこと）、伊弉諾尊（いざなぎのみこと）、速玉男命（はやたまのおみこと）の三神。明治五年（一八七二）に無格社に列し、明治八年の地租改正の時に官有地となった。社地は四十坪、社殿間口一間半、奥行き一間であった。

神社は昭和十三年（一九三八）に再建された。この時の神社建築にあたって、桜峠の向こうの豊川村（現・飯豊町）からひとりの若い大工職人が峠を越えてやってきた。峠の麓の橋本屋に宿をとった若者は熊野神社再建のために一生懸命働き、その年の十一月十五日に立派な仕事を成し終えた。この大工が好青年だったことから、橋本屋の主人加藤芳太郎氏



羽越水で「寺の前」に移転した社殿（昭和63年）



「熊の前」の横川べりにあったころの熊野神社(昭和37年)



東原に建つ現在の熊野神社

石動信仰の発祥の地は、能登半島の付け根、氷見市と七尾市の間の中能登町にある石動山(せきどうさん)である。この山は、天平宝字八年(七六四)泰澄大師によって開かれた真言宗の霊山である。中世

五下叶水石動神社



熊野神社のご神体

が仲人になって村一番の美人と結び合わせ、仲睦まじい若夫婦が誕生した。このことから、熊野神社は縁結びの神としても知られるようになった。

社地は当初、村の中心部より北西に約三百メートル離れた村はずれの

崖の縁に建ち、前には熊の前、西又の田んぼが広がり遠く観音さままで見渡せた。裏の崖下には横川が流れ、対岸には角子岬(つくしぐら)がそそり立ち不動滝が流れ落ちる。

神社の脇には二本の合体した杉の大木がそびえ、鎮守さまとして村人の心の支えとなっていた。また、子どもたちの絶好の遊び場でもあった神社の祭礼は十月十五日の秋祭りとして賑わった。

昭和四十二年(一九六七)八月の羽越水害で横川が氾濫し、神社境内北側の地盤がゆるみ、危険な状態となったので、急遽、御神体を村の加藤太氏宅に一時避難させた。その後、昭和四十六年四月、飛泉寺跡の裏に移転鎮座した。そして平成五年(一九九三)、横川ダム建設にともない、東原に再度移転した。

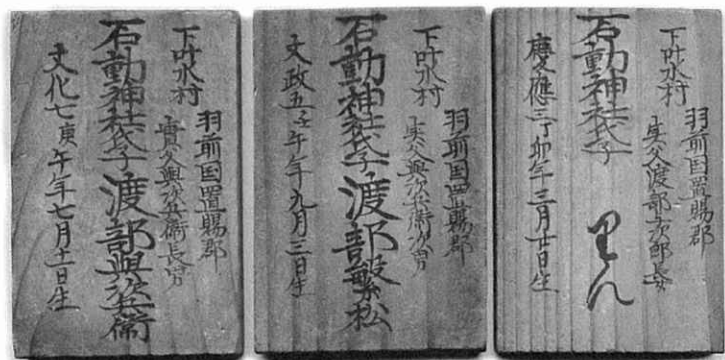
には天平寺といわれ、その最盛期には院坊三百六十余、衆徒三千人を超え、高野山、比叡山に匹敵する勢力を持っていたが、僧兵を持つ城郭であったことから、戦国時代の戦乱に巻き込まれ、加賀前田氏の襲撃を受



石動神社の社殿



下叶水の鎮守、石動神社



石動神社の木札

け、全山消滅の状態になり、かろうじて生き延びた僧兵は、ご神仏、虚空蔵尊を奉じて越中へ落ち延び、祠堂を建てて安置した。それが石動の宝泉寺にある。正親町天皇がその再興をはかるよう諭旨を下したので、次第に回復し、北陸、越後七ヶ国に勢力を振るった。上杉の会津への改易と共に広がり、また、北前船の交易と共に羽前、羽後にも伝わった。「石動山周辺には、大小の断層線

があつて、地這りや崖崩れ、時には大石まで落下する地変に、人々は畏れおののき、これを神の仕業と考え、自然の偉大な力に畏敬の念を抱き、山頂に石動彦神（伊須流岐比古）が坐すと信じ、山頂にこの神の宿る神殿を設け、次第に神社として整備された。これが石動神社（権現）の始まりである」（『小国の信仰』）

その後、神仏混淆の時代には、それぞれの山僧の信ずる仏や、神を祀ったので、各地の石動神社のご利益はそれぞれ違っていた。

下叶水の石動神社がこの地に勧請された年月は不詳である。しかし、石動信仰の盛んだった越後から阿賀野川をつたって会津に入った上杉氏の信仰が、清広寺の項で述べたような経緯で、江戸時代初め頃この地域を支配していた藤田一族によってもたらされたとも考えられる。

村の北西山上にある石動神社は、古くから村の鎮守さまとして、村人はもちろん、市野々からお参りに訪れたという。旧暦十月十五日は夜祭り。供物を供え神主を呼んでご祈禱のあと、境内の広場にみんなが集まり無病息災を祈って酒盛りをした。社殿は間口二間（約三・六メートル）、奥行き三間（約五・四メートル）

で三尺（約九十センチ）の向拝が付き、赤トタン葺きである。その両側にある二株の杉の抜根（切り口）は、直径七尺（約二・一メートル）もあり、その古さを物語っている。

棟札は三枚あり、『小国の信仰』によれば、その最古のものは次のように書いてある。

享和二年九月十九日
奉建立当所鎮守石動大明神
導師大善院
施主宿元 藤田嘉右工門
次右工門

喜三郎 小伝次
次郎左工門
小八郎 惣三郎
与次兵衛
九郎右工門 長兵衛
小太郎

最も新しい神仏分離後のものは次のように書いてある。

明治十三年九月十九日
奉建立石動神社 井之神 天下泰
平 家内安全
祠掌 教導職試補 高橋忠庵 謹書

六 村の神仏

この地域は信仰心に篤く、多くの神仏が祀られていた。無病息災、五穀豊穡を神仏に頼るしかなかった時代には、一年の節目に行われる年中行事も、ほとんどが神仏への願いと感謝のお祭りであった。

神、仏さまの祀り方もさまざまで、村中で祀ったものの、数軒が共同し屋敷神として祀ったものの、各家で祀ったもの、そして村はずれや、道路の傍に石碑として祀ったものなどがあつた。

◆ お不動さま（市野々）

市野々のお不動さまは、西方そそり立つ角子嶮の麓に流れ落ちる出生

の滝（または不動滝）と呼ばれる滝の下にある。

その昔、「滝面山飛泉寺」を建立した傑堂能勝和尚は、桜峠を越えて



お不動さまが祀られる出生の滝（不動滝）



東原の飛泉寺に祀られた不動尊

市野々の入り口にある鑑坂に立つて前方を眺めると、北西の山裾に一筋の滝を朝霧の間から、望み見るこ
とができた。この景色に心を打たれ、この滝を出生の滝と命名し、よく見えるこの地に寺を建てた。これが「滝面山」という山号の所以である。

滝は、北西部山地に発源する「滝

の沢」の水が横川に臨むところであり、断崖にかかる布瀑は見事である。高さ約十メートル、幅二メートル、その下に滝壺があり、杉の太木に囲まれ、ここに不動尊が祀られている。その裾には、横川べりを向原から叶水に通じる旧中津川街道があり、この道路から望む滝の姿は幽境であった。このお不動さまは眼病にご利益があるので、参詣者が多く、特に信心者はこの道を「百度詣り」する者もあったという。

昭和四十二年（一九六七）の羽越水害で御神体が流出し、その後復興されないままであったが、昭和四十八年（一九七三）に住民一同発起し、滝の裏側に穴を掘り、銅板に「不動明王 市野々中」と打ち出した御神体と剣一本を納め、九月十五日、楠孝老師のもと入魂式を執り行った。



町原の墓地に移転された送り地蔵

◆ 送り地蔵 (市野々)

集落の西方、西又の中津川街道沿いに共同墓地があつて、その入り口に祀堂が建ち、中に高さ一・二メートルの石仏が黒い装束をまとい納められている。これが「送り地蔵」である。

お盆やお彼岸などのお墓参りには、まずこの地蔵さまをお参りしてから墓地に入った。また道中を通る人もよくお参りし、つねに花や供物が供えられ線香の煙が絶えなかった。

その呼び名の由来については必ずしも明らかでないが、墓地の入り口に立っていることから、死者がこの

世からあの世に行く境で迷うことなく極楽浄土へ行けるよう、お送りする役を持つ地蔵であるといわれている。また、ここは村はずれで、隣集落の下叶水まで約二キロのたいへん寂しい場所であることから、夜遅く通る人は、お地蔵さまに頼めば道を間違えることなく安心して歩けたという言い伝えがある。

平成五年、横川ダム建設により、市野々の共同墓地が町内町原地内に移転し、その入り口に地蔵堂が新築安置された。

◆ 観音さま (市野々)

市野々から越後街道を東に進むと、老松がそびえる峠に差しかかる。ここが十三峠の一つ桜峠、その登り口が観音坂で、この辺一帯を地元の人々は観音さまと呼んでいた。

白子沢へ向かう村はずれにあつて、道中の安全と災難が村に入り込まないことを願い、多くの石碑が立ち並ぶ浄地である。

登り口には身を清める池があり、すぐそばに旅人を供養した「奉順禮当国霊所供養塔」、山岳信仰の「飯豊山」、そして「道祖神」などの石碑が並ぶ。しばらく登ると老松に囲まれた広場に出る。そこに「馬頭観

音」を祀る石祠がある。

その先が鐘坂で、南北朝時代傑堂能勝和尚が通りかかり鐘に御光が差したことから、その名がついたと伝えられている。ここから美しい市野々集落の全景が見渡せる。

「馬頭観音」は、集落内で飼っている牛馬や越後街道を往来する牛馬が災難に遭わないよう、同時に集落に災いが入り込まないように祀ったも



観音さまの祠と庚申塔



観音さまの入り口に建つ常夜灯



於米沢橋より観音さまを望む

のである。いつ、誰によつて建てられたかは不明であるが、広場の正面に生えている杉の巨木の下に、石の祠と灯籠が一对立っている。

五月八日の春祭りには、餅をついてお供えし、飛泉寺の住職に拝んでもらった。六月二十日は牛馬の祭り。朝食前に牛馬を「馬ひやし場」（汚れた牛馬を川で洗つてやる場所）できれいに洗い、観音さまにひいていく。祠のそばの杉の周囲を三回まわり、米ひと握りとお賽銭をお供えし

た。

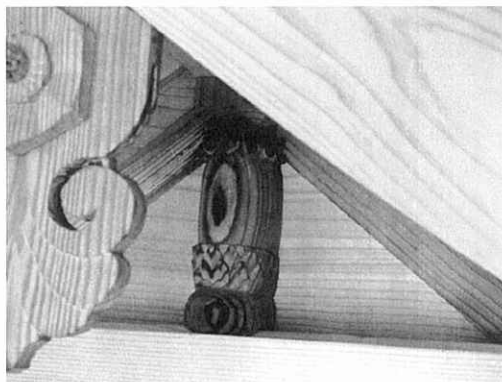
この地は、見晴らしのよい広場であることから、子どもの遊び場、花見などの遊山の場としても賑わい、お供え物は絶えることがなかった。

◆河童さま（市野々）

河童の伝説が残る市野々では、古くから河童さまの像が川端に祀られていた。河童さまが風雨にさらされたままではもったいないと、昭和十三年頃、大銀杏の近くの「はぐろやしき」に移されたという。その後、建物が解体されたので御神体を熊野神社に移し、末社として祀った。



河童が棲むという、水遊び場の河童穴



東原熊野神社に祀られた河童さまの御神体

今は熊野神社とともに東原に移転している。「二つ目」みたいな模様の甲羅を背負い、水に飛び込む姿のような、珍しい河童さまである。

◆だいでんばこの道祖神（市野々）

市野々を東西に走る中津川街道の西方村はずれに、西ノ沢が流れそれを渡つて下叶水へと行く。その渡ったところが「だいでんばこ」と呼ばれていた。昔、沢に橋は架かっていなかった。

その沢の近く杉の根元に奇妙な形の大石が鎮座していた。男女が抱き合っているようにも、男根のようにも見えるこの石と謎めいた地名から、



道祖神として祀られてきた「だいでんばこ」の霊石

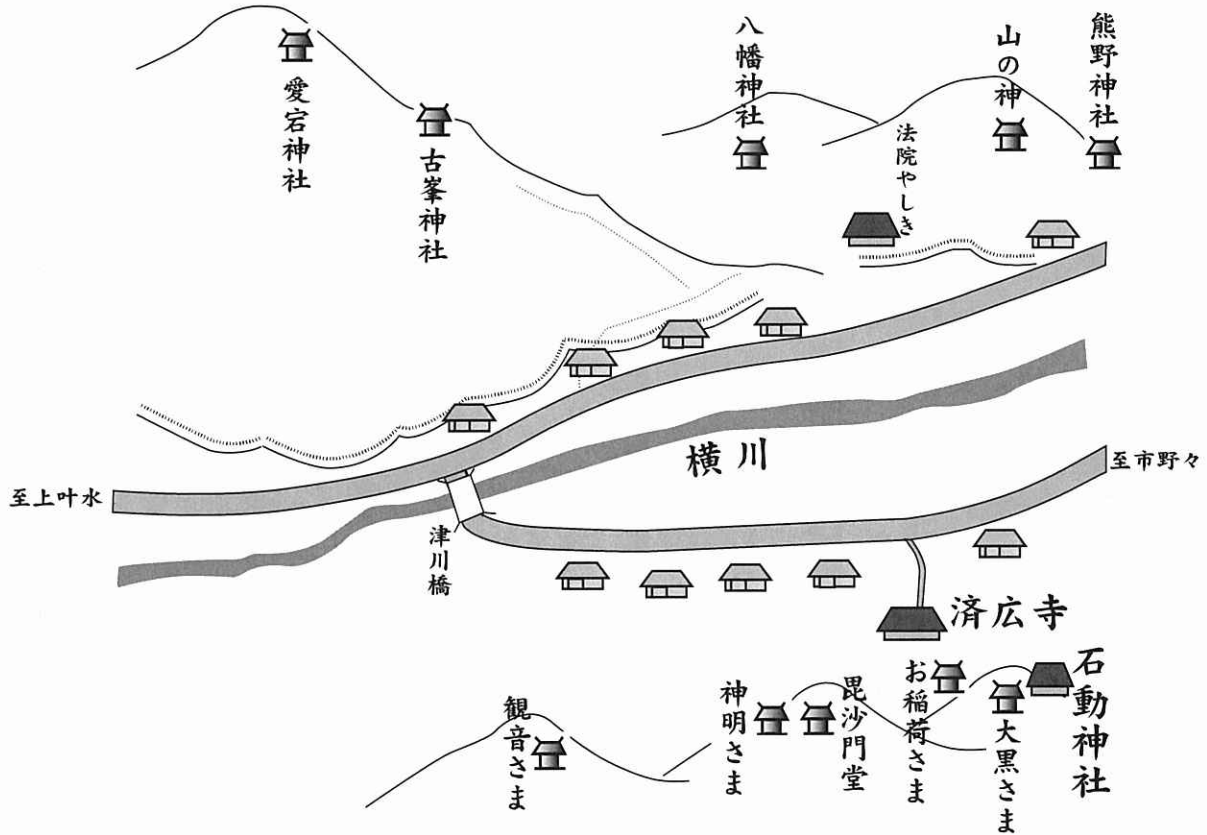
雲水の言伝えも残っている。

この霊石は、長い間、頭の部分だけを少し地上に出した姿のままで、「決して石の頭を踏むでないよ」と言い伝えられてきた。昭和に入り、村人足で掘り起こし、近くに安置して道祖神として大切に祀ってきた。横川ダム建設にともない、今は東原の熊野神社脇に移転されている。

◆愛宕神社と古峯神社（下叶水）

愛宕神社の本社は京都の北西、愛宕山（九百二十四メートル、朝日峰、嵯峨山ともいう）の山上にあって、

下叶水の神仏



王城の鬼門である北東の比叡山、鞍馬山に対し、裏鬼門に位置している。大宝年間に役小角（えんのおずぬ）が開いた山岳修験道の霊場で、神仏習合の社である。天応元年に慶俊が中興し、和氣清麻呂が朝日峰に白雲寺を建立し愛宕大権現として鎮護国家の道場としたと伝えられる。神仏習合の時代には、本殿に本地仏である勝軍地藏、主祭神は火神の迦俱槌命、奥の院（若宮社）には愛宕山の天狗太郎坊が祀られていた。

徳川家康が江戸に城を築いたとき、火防を願って芝に愛宕神社を建立した。これにならって諸藩でも愛宕神社が次々と建立されていった。

下叶水の愛宕神社は集落の北西にそびえる愛宕山（四百六十四メートル）の山頂に祀られている。

そこには僅かな平坦地があり、四方の見通しがよく、新股や大石沢まで一望できる景勝の地である。

愛宕神社は「愛宕さま」が主神で、「古峯さま」を併せて祀っている。約二百メートル下方には古峯神社があつて、こちらでは愛宕さまを合祀している。

愛宕神社の祭りは八月四日。この日に行われるのは、今から百四十年ほど前の安政六年（一八五九）、横

川東が火元で川西の民家まで延焼した大火があり、火事の恐ろしさを知った村人が八月四日に改めて愛宕神社を祀り、火伏せ鎮火を祈願した



愛宕山を望む（昭和32年）

ことによるという。

古峯神社は、本社が栃木県鹿沼市にあり、祭神は日本武尊である。この神は景行天皇の皇子で武勇にすぐれ、年少で九州の熊襲を伐ち、その後東国の蝦夷を鎮定し、帰途相模



毘沙門堂

◆ 毘沙門堂（下叶水）

で天叢雲剣をもって野火の難をのがれた。この故事にちなんで古峯の神は「火伏せの天狗」の信仰で知られているが、御神徳は単に火防だけではなく、開運、五穀豊穡、交通安全、商売繁盛など心願成就の神である。信者は古峯ヶ原講をつくり、毎年二人ずつ代参人を立てて本社に参拝祈願し、「古峯神社鎮火祭御祓」の御札をお請けして各戸に配る。三月十五日には互いに誘い合ってお詣りする習わしであった。

下叶水、済広寺の裏山の小径を登ると、神明堂と並んで毘沙門堂がある。両者は同型の石祠である。毘沙門堂は毘沙門天を祭神としているが、この縁起については不詳である。

毘沙門天は多聞天とも呼ばれ、持国天、増長天、広目天と共に四天王の一人である。この四天王はインドの中央須弥山の中腹の四方にある門にそれぞれ配置され、仏を護る武神とされている。その後、インドでは毘沙門は仏教の守護神としての性格の他に、インドのクヴェーラ神が持つ

七 庚申講と講中参り

◆ 庚申講

市野々の庚申講中は、和泉屋、加賀屋、大黒屋、岩船屋、木ノ谷屋、加州屋、吉野屋、若松屋、森下屋、水上屋の十軒講と太七一軒講の二講があった。

庚申とは干支のひとつ、「かのえさる」のこと。庚申待ちといって、庚申の夜、仏家では帝釈天および青面金剛を、また神道では猿田彦を祀って徹夜する習俗である。これは中国の道教の守庚申に由来する禁忌で、日本には平安時代に伝わり、江

戸時代に盛んになった。庚申の夜に眠ると、人身中の三尸が罪を天帝に告げるとも命を縮めるともいわれている。庚申待ちの仲間を組むのが講であり、庚申講として市野々でも古くから行われてきた。

傍には、同型の神明さまの祠堂がある。この峰を通称「神明さま」といい、毎年春四月十六日お祭りを行っている。

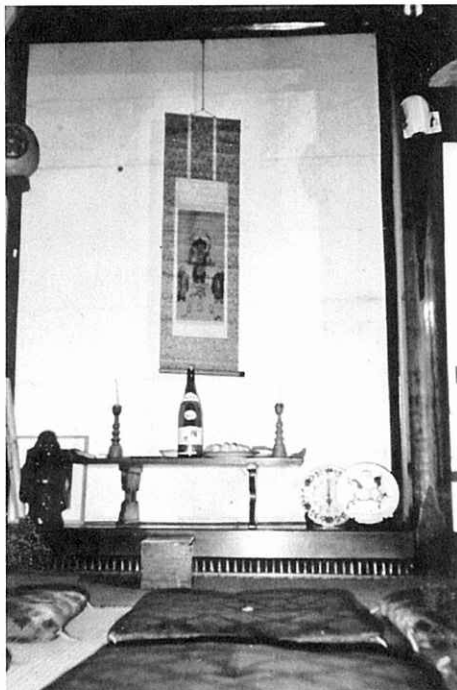


市野々の庚申講(昭和33年)

六十日に一度めぐってくる庚申月のかのえさるの日に、廻り番の宿で行う。庚申の朝、朝食前に講中のおつかいをし、当番宿では「からこ」などの供物と精進料理を準備し風呂を沸かしておく。夕食前、集まった者から風呂に入って身を浄め、羽織に庚申袴を着ける。床の間に掛けられた庚申さまの掛け軸は、正面に日輪と月輪を従えた猿田彦、さらに見える言わざる聞かざるの三猿が配されたものである。

備え付けの厨子が配られ、お供物のだんご作りに取りかかる。囲炉裏を囲み鉤(かぎ)に鍋を下げだんごをゆでる。皿の真ん中からこを、周りにゆであがっただんごを盛って御神酒と一緒に供える。庚申講は女子は入れなかったため、こうしたことはすべて男子が行った。

一同が水で口をすすいだんごのゆで汁を飲み、続いて拌み上げとなる。掛け軸の前に経机を置き、お供えをして灯明を立て、神前に導師が座り



市野々で祀る庚申さまの祭壇と掛け軸

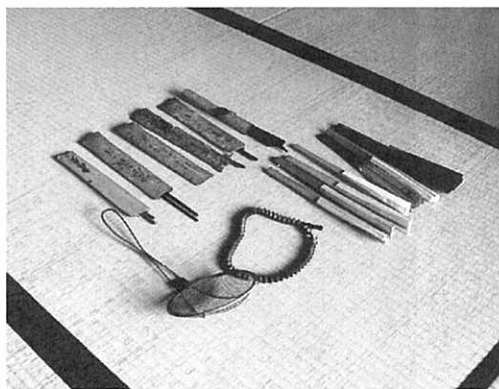


村はずれの観音坂に立つ庚申塔

扇子を広げて前に置く。後ろに全員が座り導師の音頭でみんなが「オコシンデ、コウシンデ、マイタリマイタリ、ソワカ」と百八遍唱える。回数 は導師が百八玉の数珠（場合によつてソロバンの玉を使ったことも

ある）で数える。講中に病気の人がいて代参する場合には、酒一升を供えさらに百八遍唱えるのが習わしであった。 拝み上げが終わると「なおい」となり、最初は備え付けの各自の箸で団子をいただいた。ごちそうは精進料理、酒は一升と決められていた。しかし一晩中寝ずに過ごすには一升ではとても足りず、代参者が供えた酒や宿元のどぶろくを追加し相当飲んだ。 講中の者は、家にいる男子の数だけ「おもしろい」として、からこなどお供えものを持ち帰り男子のみ食べることができた。

庚申塔（塚）は、数年に一度の七



庚申講で用いる数珠、扇子と各自の箸

庚申の時に、塔婆に石碑を建てる。最近 は昭和六十三年に建てられた。 向原に十数基、木ノ谷に一基、観音さまに一基ある。この石碑は道祖神のように村はずれに建てられ、疫病や災難が入り込まないための守り神となった。 下叶水では庚申講に関する記録が残っており、古老の記憶の範囲にもないことから、市野々のようには行われていなかったようである。しかし各家ごとに「おコシンさま」を祀る家も多かった。庚申のあたり日になると、やはり掛け軸などを掛け、灯明を灯してかわり御飯（炊き込み御飯など）を供えた。



お供え物のからこ

◆ 山の神講

小国の郷は山国である。山には山に関する一切を支配する山の神がいる。古代から連綿と受け継がれてきた自然崇拜は、山岳崇拜などに枝分かれし、またそれが庶民的な山の神信仰へと広がった。

市野々では炭焼きや鋤柄台取り（フナで作る唐鍬の柄）など山での仕事に携わる人々で、福島にある「大山の神」にお参りする講中を作っていた。年末になると集落の「契約」

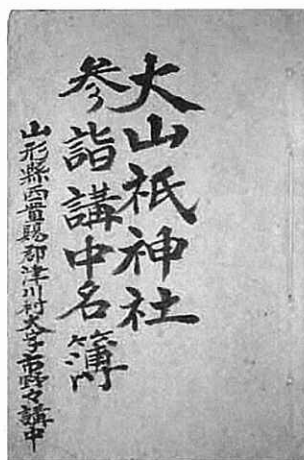


山の神の祠（十七の林）

とは別に山の神講を開いた。宿は廻り番で、山の神の祭神である大山祇命の掛け軸に向かい、神への感謝と無病息災を願って拝した後、翌年のお盆に代表参拝する二人を決め、直会となった。

また、山の神は農業の神さまである。春になると里に下って田の神となり、秋には山に帰って山の神となる同一神である。二月十六日は「お田の神さま」で、大きなだんご（田の神だんご）を十六個作り、ザルに入れて神さまに供えた。この日から山の神が田の神となる。十月十六日も同様に祭りをする。この日から田の神が山の神となる。また、毎月十二日と十七日は山の神のあたり日であり、山には入らないようにしていた。

下叶水には「講」はなかったが、旧暦の三月十七日に山の神祭りが行われていた。



山の神講中名簿

◆ 大宮講

大宮神社と子易神社が合祀されて小国郷の総社として尊崇されてきた大宮子易神社（小国町大宮）は、古くから安産の神として広く知られている。小国郷七不思議のひとつに「大宮の産屋」というのがある。この土地では子どもを産むときは必ず産屋に離れるが、婦人たちはお産を決して恐れない。神様が産ませてくれるものと固く信じているからで、難産、流産が絶対ないというのが七不思議の所以である。

そのようなわけで、近郷近在の婦人たちは大宮講にも熱心だった。市野々でも若連中の妻が一戸一名参加して飲み食いする大宮講を開いていた。旧暦十二月二十日、村の諸事を取り決める「契約」行事と一緒になつて続けられていた。講では翌年の七月十八日に大宮神社に代表参拝する二名を決めるのが習わしであった。下叶水では、「契約」より前の新暦十二月十八日に大宮講が行われていた。廻り番で宿の家が決まっておき、妻たちが朝から宿の家に集って、宿が用意したごちそうや飲み物（酒）を囲み楽しく過ごしたという。

◆ お伊勢参り

一生に一度は「お伊勢参り」というほど、伊勢神宮参拝は農民たちの切なる願望であった。多額の道中費用やお穂穂料が必要となるほか、日光や江戸、奈良、大坂、京都などの名所旧跡をめぐる観光も兼ねていたので、二ヶ月以上もかかる大旅行となった。

嘉永七年（一八五四）十一月十六日市野々村の加藤英吉（三十一歳）他五人が伊勢参りに旅立った。当時米沢藩では、引き続いた凶作により荒廃した農村の立て直しを図るため「伊勢参宮、湯殿山参り等を停止する」禁令を通過した。しかし、天保以降は五年ごとに令達されていたにも拘らず、伊勢参りは絶えることがなかった。それほど魅力のある旅行であったのだろうか。

加藤英吉は市野々二八八の「太七」（宿場時代は八藤屋Vといい、牛馬宿であった）の五代目として文政六年（一八二三）に生まれ、幕末には市野々村の寺小屋の先生（筆子たちが建てた石碑が残っている）、明治四年（一八七二）には、市野々村の長百姓、明治二十二年（一八八九年）まで津川村の初代助役を務めた。他

の五名については、書いたものが残っておらず不明である。

六十六日間にもおよぶ「お伊勢参り」の道中や旅籠の様子を書いた、加藤英吉の筆による『参宮道中記』が残されている。



英吉の筆子が建てた記念碑

以下、「お伊勢参り」の時代背景と、「参宮道中記」による道中の様子について記述する。

● お伊勢参りのこと

「お伊勢参り」とは、その言葉が



加藤英吉の生家、鹿藩置県の後、英吉は市野々戸長となり、明治20年代には津川村の助役を務めた（昭和48年）

日本各地の地域文化、産業構造まで変える大きな意味を持ったものであった。

●伊勢参詣の歴史

伊勢神宮は皇室の祖先を祭ったところであり、平安時代までは皇室関係者以外は足を踏み入れることができない場所であった。

室町時代になって、足利將軍家の度重なる参宮によって、守護大名、戦国大名の参宮、さらに武家や農民へと参宮は広まっていった。その後は神社側からの参詣を促すさまざまな宣伝もあって、次第に全国の庶民にも広がり、「お伊勢参り」は国民的一大行事となっていく。

江戸時代になると、藩士同士の争いも収まり、庶民は平穏な生活が送れるようになり、遠方への旅も安心して道中を過ごすことができるようになった。伊勢参りも信仰からくる巡礼の旅から、次第に観光旅行という要素も強くなる。

表すとおり、伊勢神宮に参詣することである。しかし、その言葉の内容は、出発するところから、その道中の様々な見聞、体験、道中かかった費用も含めて、「お伊勢さま」に参詣する総体を含んでいるといえよう。

また、徳川幕府の命による参勤交代も頻繁に行われ、全国から江戸への街道が整備され、宿場町も形成されてきた。全国の各街道には約二十キロメートルごとに宿場が生まれ、大名行列が泊まる大きな宿場町も数

多く形成され、旅行者を相手に商いをする者も増えてきた。このような環境整備も「お伊勢参り」がしだいに広がる大きな要素となった。

●御師（おし）の役割

もう一つ、伊勢参りが全国に広まったのは御師の役割が決定的なものであった。現在の広告代理店と旅行幹旋業のようなものであるが、全国に散らばって伊勢参詣を勧めていったのである。

御師は、元々は伊勢神宮の神職で、平安から室町時代の頃より、神宮の御札（御神札・大麻）を広めていったのが始まりのようである。その後、しだいに神宮への参宮を勧める役割を果たすようになった。

御師の役割が全国的に広がると、伊勢神宮にとって欠かせない存在となり、大きな地位を占めるようになった。置賜地方は「三日市太夫次郎」という御師の支配下であったといわれている。

御師はこうして参宮に送り出す一方、伊勢では大きな邸宅を構え、参詣に来た人の宿泊、食事の世話や、各種の神事、神楽奉納も自邸内の施設で行った。今まで食べたこともない豪華な食事や、立派な寝具で寝る

ことができた。さらに、長旅で持参できなかった羽織や袴、袴の貸し出し、内・外宮の案内、参拝終了後の近郊の観光案内など最大限のサービスをを行った。

強固な伊勢参宮のシステムを作り上げた御師であるが、明治維新後、御師の制度は政府の方針で廃止させられた。伊勢講による「お伊勢参り」自体は昭和の初めまで続いたが、御師による伊勢参宮のシステムは終焉を迎えた。

●お伊勢参りに行くために

このように広がっていると、一生に一度は伊勢参りに行くという願望が庶民の間に定着し、また外宮が、産業、生産の神である豊受大明神を祭っているため、農民の間にも豊作を願って、伊勢参りに行くためのさまざまな方法が考え出された。その代表的なものが伊勢講である。

御師はこの方法を取り入れて、伊勢参宮のシステムを作り上げた。村の中に講を作り、講員は定期的に講元の宿に集まった。天照大神の掛け軸を掛け、その前には酒、肴、五穀などを供え、正装して祈願した後、積立金を集め今年の講の代表をくじで決めた。終わると宴会が始まる。

講を代表して伊勢参りに行き、講員のお札をいただいて来るので「代参人」と呼ばれていた。

出かける季節は収穫後の晩秋がほとんどであった。行く人数は、一人ではなく、二三人から数人であった。これは、講員の貴重な積立金を使うので、互いに監視して紛失や無駄使い（博打・遊里）をしないために、また旅の安全を考えてのことだろう。

●道中の行程、様子

出かけるのは、一般的に秋の収穫が一段落した季節であるから、十一月頃であろう。加藤英吉一行も旧暦の十一月十六日に出発している。

村はずれまで講員が見送り、水杯を交わした。当時のこと、やはり無事に戻るか心配は尽きなかったのであろう。旅に必要なものは一揃いそろえ、路銀を大切にしまい、通行手形を持って出発した。関所を通るときに必要な通行手形は二種類あり、一つは、寺が発行する、キリシタンではない証明を記したもの、もう一つは、前の宿場で泊まった宿で発行する宿泊証明書のようなものである。

江戸も中期以降になると、道中の案内図も数多く出版され、宿場間の距離、駄賃額などを絵図（地図）を

示しながら細かく記入し、携帯できるように折りたたみ式になったガイドブックができていた。

また、各地に数多く残る伊勢参詣の道中記は、きちんと清書されて残っているが、これは、伊勢講による代参で参宮してきた人が、これから伊勢参りに行く人のために書き残したもので、いわば出張報告書のようなものだったであろう。加藤英吉が記した『参宮道中記』も、次に行く者にとって立派な案内書の役割を果たしたのだろう。

五街道（東海道・中山道・中仙道・日光街道・甲州街道・奥州街道）と呼ばれた街道は参勤交代や物流、通信の幹線として整備がすすみ、各宿場町の機能も充実し、道中をサポートする職業も様々生まれていた。大きな川の船渡しや、蓮台渡し、また女子や子どもの旅を先導する仕事もあった。宿は、大きな宿場町では大名が泊まる本陣、脇本陣から、一般の旅行者が泊まる本宿や木賃宿、宿場間には合の宿や茶屋などがあつた。また、浪花講と呼ばれる安全で良心的な宿が次第に増えていった。

道中の費用は、かかった日数によっても変わるが、一日の最低経費は三百文くらいだったようである。

宿泊がおおよそ二百文、昼食代が

七十〜八十文、他に、着替えやわらじ代、橋の渡しなどの交通費、土産代などが必要であつたろう。米沢から江戸までは約十日かかるが、途中、奥州街道からそれて日光街道に入り、東照宮を参拝していくと、十五日ぐらいかかった。江戸で二、三日あちこち見物して、東海道を伊勢までは、約十五日かかったのだ。都合約一ヶ月の旅であつた。さらに費用と時間の余裕があるときは、高野山、奈良、大坂、京都、そして金毘羅さま参りまで足を延ばすこともあつた。帰りは、京都まで戻り、中山道を通り長野の善光寺参りをして、新潟に抜け戻ってくるコースだったようである。

加藤英吉一行の場合、六十六日の日程であつたから五両以上、他に、日光や伊勢、善光寺などの初穂料や案内料などで一両以上掛かっているとと思われるので、少なくとも七両くらいの費用であつたと思われる。江戸末期の頃には、幕府の弱体化から、インフレが進んでいたもので、実際はもっとかかっていたかもしれない。ちなみに蕎麦が二八蕎麦といわれて十六文の値段が続いたが、慶応には二十〜二十四文、銭湯が八文くらいであつたものが慶応には十六文

に値上がりしている。

これだけ大金を懐にしまいこんでの道中の旅はさぞかし心配であつたことだろう。地方によっては、御師の手配によつて、為替の制度ができていたところもあった。これは、地元の寺や有力者が、お金を預かり、為替の手形を発行し、伊勢の御師の所で換金する方法である。この方法が使えれば、持ち歩く現金は、約半分で済むことになり、少しは安心もできたと思うが、置賜地方にはこのような制度があつたのかどうかは分からない。

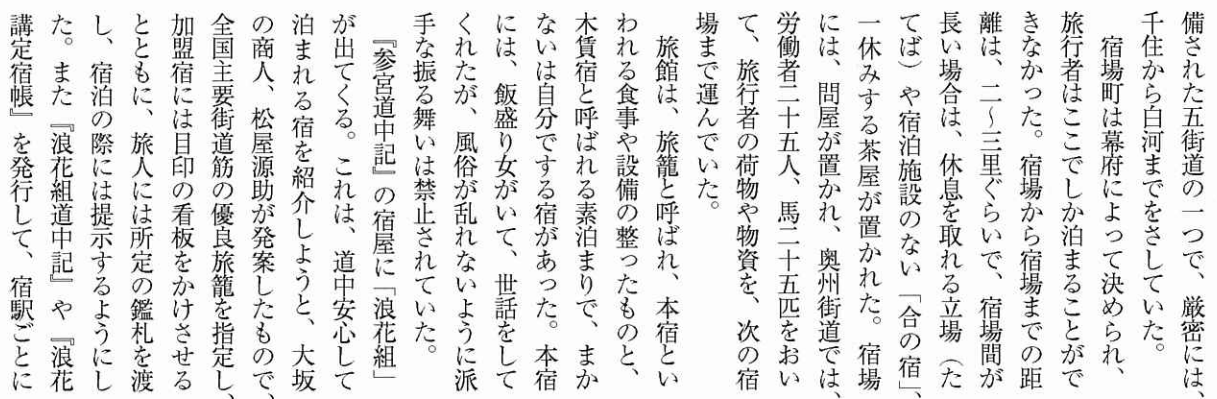
●加藤英吉一行の路程

市野々から伊勢までの道中を、街道を中心に見てみよう。

市野々から米沢までは、越後街道を通つた。市野々を出るとすぐ桜峠を越え、十三峠の最後の諏訪峠を越して小松（川西町）に入り、そこから現在西街道と呼ばれる広嶺、成島を通り城下へ入る。米沢の終点は米沢城下、大町の札の辻である。そしてここから板谷街道が始まる。福田町、通町を通り関根、大沢、大石、板谷と続き福島にいたる。

福島からは奥州街道に入る。奥州街道は江戸時代に幕府によつて整

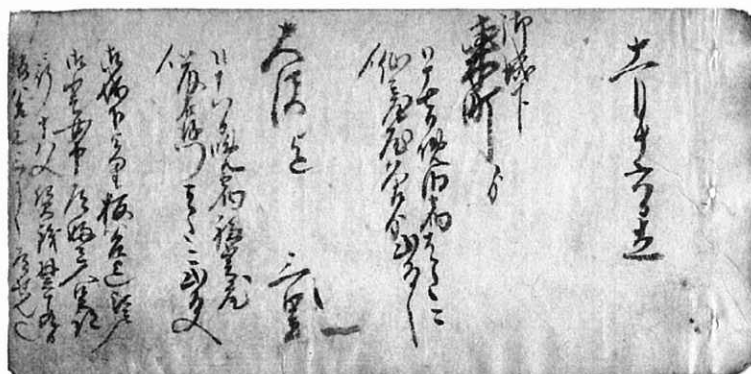
市野々加藤英吉他5名
嘉永七年甲申年十一月吉日
「参宮道中記」より



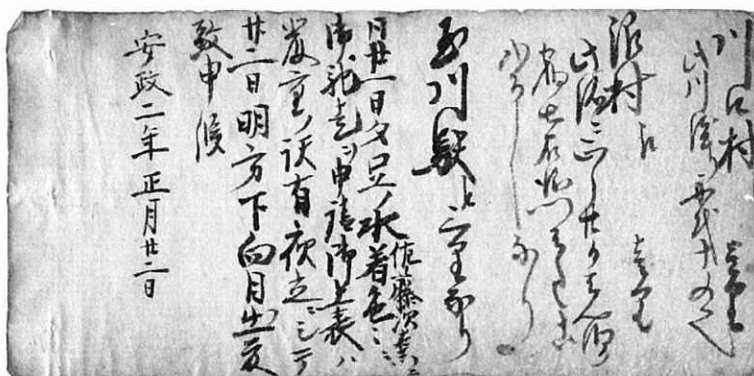
204

伊勢参りの旅は、もちろん、伊勢神宮を目指していくが、途中に有名な神社や観光地があれば、一生に一度の旅と寄り道をしていく。日光もそんな場所の一つである。日光街道は、五街道の一つとして、江戸の千住から宇都宮までは奥州街道と重なっている。宇都宮から分かれて日光へ入る。ところが、奥州街道を上る旅では、宇都宮まで行ってから日光をめざすと、遠回りになってしまう。そこで、大田原から奥州街道を離れて、日光北街道といわれる道を通ると近道になる。つまり、宇都宮まで行くと、八駅になるが、この北街道を行くと、矢板、玉生、船生大渡、今市と五駅で着くことができる。このため、奥州街道を上る参宮者にはよく利用されていた。今市は街道沿いの杉並木が有名である。日光街道が、他の街道と違うのは、徳川家康を祀った日光東照宮への街道として、徳川幕府重臣、大名から庶民まで、参詣のために賑わった街道であることである。

全国から参詣者が訪れてくるが、一般人は本殿を参拝することはできなかった。この時は、たまたま大名の参詣に付いていくことができ、幸運であった。「その大きさと社の多



11月16日、出発した日のこと



翌年1月22日、無事帰った日のこと



加藤英吉が記した道中記
(嘉永7年、全96頁)

さ、贅を尽くした豪華さに、筆紙尽くし難し……」と書いている。おそらく生涯の内で見ただけの建物群であつたろう。浪花組の旅籠では、東照宮の案内もしてくれていた、あちこち見て回り、初穂料を出して御札を受けた。日光には、着いた日を入れて三日間滞在している。

この後、古峰ヶ原の古峰神社まで足を延ばしている。この神社は、日本武尊を祭神として祀っていて、天狗信仰で有名なところで、大きな天狗やカラス天狗の面がある。

ここから鹿沼へ出て、小山で奥州街道に戻り江戸を目指して歩を進めた。

市野々を出てから十六日目に江戸へ入り、二日間江戸見物をしている。一日目は、江戸城、大名屋敷、愛宕山、芝増上寺、西本願寺、新大橋、両国をまわっている。この日には、桜田の米沢藩江戸上屋敷を訪ねている。

「お伊勢参り」の旅では、参詣者が、自国の江戸藩邸を訪ねることがよくあった。米沢藩では儉約令によって、本来なら伊勢参りは禁止されていたが、江戸まで来た以上、信仰が目的の代参者であることから、藩邸では追い返すわけにもいかず、招き入れて労をねぎらったという。二日目は、



英吉が使用した道中笠

英吉が使用したわらじ

神田明神、湯島天神、上野の不忍池、東叡山、さらに浅草観音、蔵前などを巡っている。

江戸を出て日本橋から、東海道に入る。この街道は、これまで以上に往来が賑やかで、宿場も大きく、同じ伊勢参りの一行とも旅籠で一緒になり、お互いのお国の話や情報交換ができて、面白かったに違いない。

鎌倉では、鶴岡八幡宮、鎌倉の大仏を見学し、江ノ島の旅籠では、普通の倍近い四百文を払い、大御馳走が出た。箱根には関所があり、江戸で泊まった旅籠の出した手形（宿泊

証明書）を見せて通り抜けている。

箱根から先は地震の被害があとこちらに見られた。これは、安政元年（一八五四）十一月四日、東海地方を中心にマグニチュード八・四の地震が起きた直後の道中であつたためである。ここに着いたのが十二月七日であるから、一ヶ月後のことで、地震の被害の様子が生々しく残っていたのだろう。掛川城が大破し一行が通つた時、城下は焼け野原であつた。また、駿府城も破損し、袋井、三島、沼津などで多くの家屋が倒壊した。全体で約八千三百戸が倒壊し、一万人が死亡したという。この地震による津波で、下田が壊滅し、停泊していたロシアの軍艦ディアナ号が大破し沈没した。

掛川の追分から秋葉街道に入り、秋葉神社を参詣し、さらに鳳来寺まで行つた。この秋葉街道は、全国の秋葉信仰の本山である秋葉神社への街道であるとともに、甲州へ塩を運んだ「塩の道」としても知られている。鳳来寺は、大宝二年（七〇二）利修仙人が開山、後に源頼朝が再興、徳川家の厚い信仰を受け、徳川家光が伽藍を建立し、東照大権現を祀つた。

ここから新城を通り御油へ出て東

海道へ戻り、藤川、岡崎と進み、名古屋へ着いた。名古屋は、江戸と同じくらいの賑わいに見えた。もちろん、金の鯨の名古屋城も見上げたことだろう。津嶋神社へ詣で、桑名、四日市と歩き、ここで、東海道から伊勢街道へ入る。津、松坂を通



英吉が使用した道中着

り伊勢山田へ着いたのは十二月十七日で、江戸から十四日目、出発してから、三十二日目であつた。

伊勢では、御師の三日市太夫の屋敷に三泊している。夕方着いてすぐ落物（初穂のように神に捧げるもの）をあげて、夜はたいそうな振る舞いを受けた。

翌日から外宮、内宮、末社、天岩

戸、朝熊嶽などを巡り、晩はご馳走が続いた。そこは、日常の生活とは別世界で、大歓待を受け、戻つて講の人々に土産話を聞かされると、一度は行つてみたいと思うのだろう。この御師の宿での歓待も、「お伊勢参り」が長期にわたつて続いた原動力の一つになつたと思われる。

気持ちよく伊勢神宮を参拝した後、津まで戻り、ここから伊賀街道に入り、奈良へ向かつた。奈良を見物し、南下しながら、大和の国を三日間かけて歩き、吉野山まで足を延ばした。桜で名高い吉野山は、室町時代、後醍醐天皇が吉野朝廷（南朝）を置き、ほんの一時期政治の中心でもあつた。その後、一行は、高野山に向かつている。高野山は、弘法大師によって千二百年前に開かれた真言密教の修行道場であり、全国に広がる高野山真言宗の総本山（金剛峰寺）で、全国から信者の参詣で賑わっている。ここから戻つて、堺に入り、大坂に向かつた。

大坂、京都で五日間滞在し、京都で正月（旧暦）を迎えた。京都御所見物に行つたが、ちょうどこの年（嘉永七年）の四月に炎上し、再建の工事中であつた。翌年の一八五五（安政二）年に完成した建物が現在のも

のである。

正月二日、京都を後にし、三井寺（天台寺門宗総本山長等山園城寺）を見て大津へ向かった。石山寺（紫式部が源氏物語を書き始めた寺として有名）に寄り、草津へ向かった。草津からは、東海道から分かれて中山道を進んだ。

中山道は、五街道の一つで、その前身は東山道と呼ばれ、古代から中世にかけて西国と東国を結ぶ重要な街道であった。

一行は、信州の洗馬（せば）から善光寺道に入り、長野の善光寺を目指した。塩尻、松本を通り、長野に入り、善光寺を参詣した。一光三尊阿弥陀如来を本尊とする。仏教伝来とされる五三二年に百済から渡ってきた仏像を信濃の本田善光（よしみつ）が自宅に安置したのが始まりと言われる。その後、武田、織田、豊臣、徳川によって、各地に転々と遷座されたが、ふたたび信濃に戻り、徳川幕府の寄進もあって、しだいに復興し、参詣者を集めるようになった。

ここから、野尻を過ぎ、新潟県に入り、妙高高原を越えて、新井、高田（上越市）へ出て、日本海沿いの北陸道を北上した。柿崎、柏崎、寺泊、弥彦、新潟、中條まで来て越後

街道に入り、黒川、大嶋、両関、川口、沼まで来て小国に入り、玉川まで着いた。最後の一滴を足ノ水に泊まり、翌二十二日に市野々に帰った。帰ってくる前日には、早馬を出して、帰郷の知らせを届けると、坂迎えといつて、講や村の人々が村はずれまで出迎え、「はんばきぬぎ」の宴を催し道中の無事を祝った。

道中の土産話を聞いて、いつか自分も行つてみたいと思つたことだろう。講によつては、無事を祝い、伊勢神宮のご利益を残すために記念の碑や祠を祀つたところもあった。

市野々の「太七」には、『参宮道中記』の他に、英吉が帰宅したときに着用していた「道中着」や「わらじ」、「笠」が残っている。

●産業や祭りへの影響

日本全国から伊勢を目指して参宮を続けた伊勢参りは、信仰の旅にとどまらず、産業、経済、文化の面において大きな影響を及ぼすこととなった。

閉鎖的な村社会から離れて、諸国を歩き、新しいもの、珍しいものに数多く触れて、それを持ち帰り、新しい生産や、風習、祭りとして定着させていった。

稲作中心の経済体制であった当時、農民は、道中、生産技術や、道具などに触れたり、情報を仕入れる機会が数多くあったに違いない。旅先から、棉の種子や薩摩芋を持ち帰ったりして全国各地に広まっている。ま

八石碑

さまざまな石碑は私たちのまわりに何気なくたたずんでいるが、それらが示す意味は深いものがあり、人々のくらしのより所となるものである。あらゆる事物に科学的根拠を持たなかった昔の人々の知恵と篤い信仰心がそこに息づいている。

◆市野々の石碑

石碑は村中の神社や寺院の周りにあるものと、村はずれのものに大別されよう。市野々では観音坂から鐘坂にかけて桜峠の道中に集中している。山岳信仰や供養塔、それに道

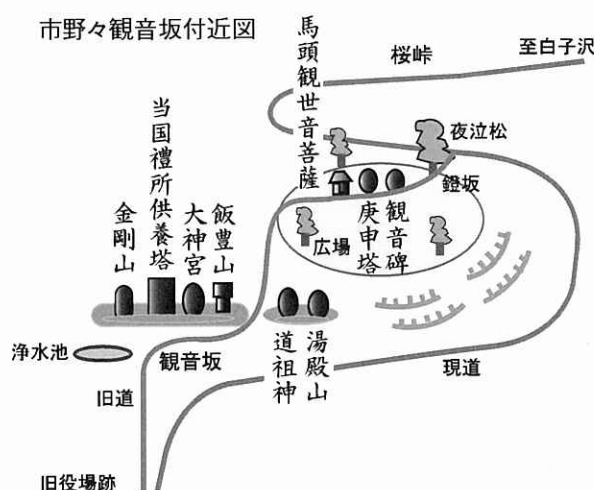
た各地の特産品やお土産を見て、その技術や生産方法を学び、持ち帰って新たに生産を始めたものも数多くあった。

民俗、祭りでも伊勢参りの影響と思われるものが数多く残っている。

祖神や庚申塔など種類はいろいろである。

山岳信仰に関する石碑には、飯豊山や湯殿山、金剛山などがある。

市野々観音坂付近図





観音碑 (鑑坂)



奉納された穴の開いた石、
耳の病氣にご利益があった (観音坂)



道祖神 (観音坂)



湯殿山 (観音坂)



市野々観音坂の石碑群



奉順禮当靈所供養塔と
大神宮碑 (観音坂)



金剛山 (観音坂)



村はずれ向原の塔婆の石碑群

る。簡単には参拝できない霊山の石碑を建て、それを拝むことで神の加護を求めようとしたのである。飯豊山はいわずと知れた地元の名山である。精進をして横川の谷間からお山参詣に向く者もあつただろうが、石碑を通じて気持ちは常に身近なところにおきたかつたものだろう。湯殿山にしても同様である。峠に至る山坂がある種の結界に見立て、神との交流をこころみる清新な修養を忘れなかつたのが村人の知恵である。街道の道標ともなつた鑑坂道祖神は、文久二年（一八六二）壬戌七月の銘がある。越後街道の通行がます



南無阿彌陀仏 (済広寺裏)



十六夜供養塔 (済広寺裏)



庚申塔 (済広寺裏)



百万遍供養塔 (済広寺裏)

◆ 下叶水の石碑

ます盛んになった頃、行路の安全を祈って建てられたものであろう。道標としては、桜峠の途中に「右須郷道ひだり海道」と刻まれた往分石も立っている（「桜峠の往分石」参照）。桜峠への観音坂には、正月参拝に訪れる「馬頭観音」の石祠もある。さらに、峠を越えた旅人の遭難でもあったものだろうか、「奉順禮当霊所供養塔」も見える。

道入り口の近くに横川ダム建設にもなつて新しい済広寺が建てられたが、向かつて右手のものは、もともとは移転新築前の済広寺の前にあつたといわれ、わずかに残る刻字痕から天保年間（一八三〇～一八四四）の建立であることが読み取れる。下叶水の高橋家（高橋米吉氏）の家系図には、同家の二代目の長太郎という人が「済広寺に湯殿山塔を寄進」と記されているが、このことであらう。

越後街道の宿場だった市野々と比べれば少ないが、下叶水にもいくつかの石碑が残されている。村の鎮守である石動神社の参道入り口の左右には、両方同じくらしいの大きな湯殿山碑が立っている。参

参道入り口に向かつて左手の湯殿山碑は、以前は川向こうの「法院やしき」（通称「坊さま」と呼ばれる場所にあつたもので、建立年代の文字は判読できない。横川ダム建設にともない移転新築

された済広寺の裏手にある歴代住職の墓の横に、八基の石碑が並んでいる。向かつて左から、「百万遍供養塔」（文化三年（一八〇六）の建立と読める）、「南無阿彌陀佛」の碑（享和元年（一八〇一）と読める）、「一類無縁供養塔」（享和元年か）、「庚申塔」（寛政十一年（一七九九）と読める）、「庚申塔」（天明八年（一七八八）と読める）、「十八夜供養塔」（建立不明）、対象不明の「供養塔」（同）、「庚申塔」（弘化三年（一八四六）と読める）である。

昔は済広寺（現在地に移る前の済広寺）の門前に地藏さまがあり、そこにこれらの石碑群が立っていたという。その後、同寺が住職のいる寺になつた際、そこから少し高台の渡部綱隆碑があつたところに移し、さらに済広寺の移転新築にともなつて現在地に移された。

下叶水の住民の記憶の中では、古くから石碑群としてまとまつていたことになるが、もともとどうだったかは明らかでない。少なくとも庚申塔のいくつかは、その性格からいって、村はずれの道端などに建てられていたものであろう。



湯殿山 (石動神社参道)



移転前の済広寺横の石碑群